

梶山女学園大学

# 暮らし方に着目した自然系ゲストハウス運営者の意識と価値観

著者	松原 小夜子
雑誌名	梶山女学園大学研究論集 自然科学篇
号	52
ページ	69-85
発行年	2021-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00002875/">http://id.nii.ac.jp/1454/00002875/</a>

# 暮らし方に着目した自然系ゲストハウス運営者の意識と価値観

松 原 小夜子\*

Consciousness and Sense of Values of the Owner of Natural Guest Houses  
Focusing on Way of Living

Sayoko MATSUBARA

## 1. はじめに

### 1.1 「暮らし方」への着目

本稿は、日本における宿泊型ゲストハウスの特質を把握しようとする研究の第7報である。本稿を含む一連の研究では、ゲストハウスを、旅館業法上、簡易宿所に分類される宿で、①素泊まりを基本とする、②ドミトリと呼ばれる相部屋がある、③台所や居間など何らかの共用空間がある、この3つに該当する宿と定義している。

こういったゲストハウスについては、既報でも述べてきたように、近年、観光学、地理学、心理学、都市計画学、建築学など様々な分野で研究が行われてきており、これらの研究からは、ゲストハウスが、簡易な宿というにとどまらず、宿泊者や地域の人など宿に関わる人々の交流を生み、地域を活性化し、古民家など既存ストックの有効利用を促すなど、交流面、地域面、空間面からみて有意義な存在であることが読み取れる（ゲストハウスに関する既往研究については、拙著『持続可能な暮らし×自然系ゲストハウス—脱消費、スロー、ミニマル、ローカル』（2020）において詳述しているので、参照いただきたい）。

同時に、ゲストハウスは、食事の支度や寝具の準備などを、サービスを受けるのではなく自ら行う「暮らすように泊まる」宿であることも特徴であるが、こういった「暮らし方」に着目した研究はほとんど行われていない。本稿を含む一連の研究では、空間に関わる「暮らし方」の学問である住居学的観点からゲストハウスの特質と今日的存在意義を捉えることを基本的なねらいとしている。

### 1.2 自然系ゲストハウスの今日的存在意義

「暮らし方」からみた場合、ゲストハウスの注目すべき特徴の一つは、古民家を利用した事例が多いことである。古民家利用ゲストハウスに宿泊して、食事や就寝などの生活行

---

\* 生活科学部 生活環境デザイン学科

為を行うことは、日本の伝統的な住文化や生活文化の一端を体験することでもあり、また、古民家が立地する農山村の暮らしや、宿場町など町家地域の暮らしに触れることにもなると考えられる。こういった視点から松原（2017b）では、古民家利用ゲストハウス宿泊者の意識や価値観を調査し、古民家での宿泊が、日本の伝統的な暮らしや地域の暮らしの再認識・再評価、現代的な暮らし方や生き方の見直しなどを促していることを考察している。

なお、本稿を含む一連の研究における古民家の定義は、「日本の伝統的な建築様式を有しているもので、昭和25年以前に建築された建物（2020年時点では築70年以上）」としている。これは、昭和25年11月に建築基準法が施行されていることから、それ以降の建物は、近代的な工法の影響を受けている可能性があると考えたためである。

注目すべきもう一つの特徴は、ゲストハウスでは、「暮らし方」に関する各種のイベントや体験プログラム（以下ではイベント等と略記する）が企画、実施されていることである。松原（2019）では、ゲストハウスで実施されている暮らし方関連のイベント等を捉え、「衣生活」「食生活」「住生活」「モノ作り」「生産・収穫」「暮らし総合」の6つに分類し、拙著（2020）では、さらに詳細に把握して「地域関連」と「健康・癒し」を加えた8つに分類した上で、これらのプログラムが、①着物や浴衣の着付け、味噌仕込みや餅つき、壁塗りといった日本の伝統的な衣食住の暮らし、②地域の伝統産業や伝統工芸、郷土料理といった地域の特性を生かした暮らし、③自然素材、自然食、有機農業、自給自足といった自然と共生する循環型の暮らし、などへの指向を特徴としていることを考察している。

さらに、松原（2020）では、これらのうち、「生産・収穫」「暮らし総合」「地域関連」に分類される4種類のイベント等を取り上げ、イベント等参加者の意識と価値観を捉えることによって、イベント等への参加後、自然とかかわる暮らしの大切さや魅力、地域の魅力などへの気づきあるいは再認識など、価値観に何らかの変化があった人が多いこと、そして、暮らし方関連のイベント等への参加が、自然や地域にかかわる暮らし方への関心を高め、価値観変化を促していることを考察している。

このように、古民家利用ゲストハウスおよび暮らし方関連イベント等実施ゲストハウスは、自然と共存してきた日本の伝統的な暮らしや、自然とともにある「自然系の暮らし」に関連深い存在であると考えられる。そこで、本研究では、この両者を「自然系ゲストハウス」と定義することとした。

自然系ゲストハウスについては、先に述べた拙著（2020）において、その定義や該当軒数、実施されている暮らし方関連イベント等、特徴的50事例、利用者の意識や価値観などを論じ、自然系ゲストハウスが、持続可能な暮らしの今日的再生という点からみて意義深い存在であることを考察しているので参照いただきたいが、ここでは、ゲストハウスおよび自然系ゲストハウスの軒数について触れておきたい。

まず自然系ゲストハウスを含むゲストハウス一般については、2019年11月末時点で854軒抽出できた（近年、京都市内に急増しているが、この軒数は捉えられていない）。このうち、自然系ゲストハウスに該当する事例については、暮らし方関連イベント等を実施している事例が207軒（古民家利用かつイベント等実施63軒、イベント等実施のみ144軒）、古民家のみ事例が98軒であり、合わせて305軒であった。

### 1.3 本研究の目的

先に述べたように、松原（2017b）や松原（2020）では、古民家ゲストハウス宿泊者あるいは暮らし方関連イベント等参加者の意識や価値観から自然系ゲストハウスの特質を捉えてきたが、この特質を運営者（経営者）の側から把握してみることも重要であるといえる。そこで本研究では、運営者の意識や価値観に焦点をあて、自然系の暮らしへの意識、イベント等の実施状況、暮らし方関連イベント等参加者あるいは古民家宿泊者の意識への影響などを捉えることによって、自然系ゲストハウスの特質や今日的存在意義の考察を深めることをねらいとした。

## 2. 方法

研究の方法は、自然系ゲストハウス運営者を対象とした Web アンケート調査とした。

まず、暮らし方関連イベント等実施ゲストハウス207例と古民家のみゲストハウス98例について、調査実施時点で再度精査し、運営者が同一の宿、対象選定時点で閉業している宿、住所やメールアドレスが不明の宿、フェイスブックが長期間更新されていない宿などを抽出したところ、暮らし方関連イベント等実施ゲストハウスでは10例、古民家のみゲストハウスでは32例が該当することがわかった（以下の本文および図表ではゲストハウスをGHと略記する）。そこで、これらを除外し、前者では197例、後者では66例を対象として選定することとした。古民家のみGHでは除外例が多い結果であったが、このうち、京都市が14例、沖縄県が4例あることから、早くからGHが存在してきた両観光地では、GHの開業が比較的盛んなためではないかと推察される。

これらのGHを対象に、2020年5月に書面でWebアンケート調査の依頼を行い、さらに7月にはメールにて再度依頼を行ったところ、イベント等実施GH57例（回収率28.9%）、古民家のみGH19例（回収率28.8%）から回答を得た。

なお、上記以外に、イベント等関連質問項目への記入がなく、古民家でもない15例からも回答を得た。このうち宿名（任意項目）が記入されていた6例は、ホームページやフェイスブックではイベント等実施が明示されているが、今回のイベント等関連質問項目への記入がない事例であったため、分析の対象から除外することとした。残る9例については、宿名が不明で確認できないため、同じく除外することとした。

調査の項目は、回答者およびGHの基本属性、自然系の暮らしに関する意識や行動、暮らし方関連イベント等についての実施状況や意識、暮らし方関連イベント等への参加あるいは古民家での宿泊が参加者や宿泊者に及ぼす影響などである。

## 3. 結果と考察

### 3.1 対象ゲストハウスの分類

本研究の対象は、イベント等実施GHと古民家のみGHに大別できるが、前者について、イベント等の実施状況を、その種類数と過去1年間の実施回数で捉えてみたものが表1である。イベント等を3種類以上行っている場合には、実施回数も多いことがわかる。そこで、イベント等実施GHを、3種類以上のグループ28例（以下ではIと表記）と、1～2種類

表1 イベント等の種類数別過去1年間のイベント等実施回数

単位：％

GH (n)	16回～	11回～	6回～	1回～	0回
3種類以上 (28)	10.7	7.1	17.9	64.3	
1～2種類 (29)	6.9		6.9	58.6	27.6
なし (19)					100.0

n = サンプル数

のグループ29例（以下ではⅡと表記）に分類することとした。なお、イベント等なし（古民家のみ）GHは、Ⅲと表記する。

### 3.2 回答者および対象ゲストハウスの属性

回答のあった運営者の性別、年代、地域とのかかわりを示したものが表2である。なお、Ⅱのうちの1例は、表2～4のいずれの項目にも未記入であったため、表2～4ではⅡの例数を28例としている。

性別では、Ⅲで女性が多い傾向にあり、年代では、Ⅲの方がⅠとⅡよりも高い傾向にある。GHの立地地域との関わりでは、「移住」が最も多く、Ⅰでは75.0％、Ⅱでは64.3％、Ⅲでは52.6％であるが、Ⅲは「移住」が相対的に少なく、「ずっと居住」と「Uターン」（当該地域出身者）も合わせて36.9％ある。Ⅲの運営者は、ⅠとⅡとは異なる属性を有しているといえる。

イベント等実施状況とGHの立地地域との関係については、拙著（2020）第5章で分析しているが、それによると、イベント等実施GHの割合が高く、イベント等の種類も多い地域は、東北、関東（東京都を除く）、中国、北陸、甲信、東海であり、逆に最も少ない地域は京都市と沖縄県である。今回対象としたGHの立地地域を示したものが表3であるが、先に述べた全国的な傾向を反映した結果であることがわかる。即ち、Ⅰでは、これら地域が多く、特に中国が多い。Ⅱでは、Ⅰに比べるとこれら地域が少なくなるとともに、東京都、近畿、京都市が相対的に多くなっている。イベント等を実施していないⅢでは、ⅠやⅡとは異なり、近畿、京都市、北海道が多い結果である。

建物形式と築年数を示したものが表4である。Ⅰは町家や戸建てが多く、Ⅱは町家や戸建ての他に、農家も若干多い傾向にある。これに対してⅢは、町家が最も多く、戸建ても多いことがわかる。なお、建物形式の「その他」とは、旅館などの宿泊施設や食堂、商業ビル、集合住宅などである。

築年数では、Ⅰの半数は古民家で、Ⅱも35.8％が古民家である。Ⅲは、築100年以上の古民家が半数強あることが特徴である。

対象GHが立地する地域の都市規模との関係を考察するために、立地地域を人口規模により、小市町村（5万人未満）、小都市（5万人～）、中都市（10万人～）、中核市（30万人～）、大都市（50万人～）の5つに分けて示してみたものが表5である。なお、都市規模については、宿名（任意項目）が記入されていた事例についてのみ調べているため、いずれのグループでも例数が少なくなっている。Ⅰでは、小市町村や小都市および中都市で74.0％を占めており、これらに立地する町家や戸建てが多いといえる。逆に、Ⅲでは、大都市が

暮らし方に着目した自然系ゲストハウス運営者の意識と価値観

表2 回答者の性別、年代、地域とのかかわり

単位：％

GH (n)	性別		年代				地域とのかかわり				
	男性	女性	20代以下	30代	40代	50代以上	ずっと居住	Uターン	移住	その他	不明
I (28)	57.1	42.9	14.3	32.1	25.0	28.6	7.1	17.9	75.0		
II (28)	50.0	50.0	10.7	35.7	28.6	25.0	21.4	10.7	64.3	3.6	
III (19)	42.1	57.9	5.3	26.3	42.1	26.3	15.8	21.1	52.6	5.3	5.3

n = サンプル数

表3 対象GHの立地地域

単位：％

GH (n)	北海道	東北	関東	東京都	北陸	甲信	東海	近畿	京都市	中国	四国	九州
I (28)	7.1	10.7	7.1		10.7	10.7	10.7	10.7	3.6	17.9		10.7
II (28)	3.6	7.1	7.1	14.3	14.3	3.6	7.1	14.3	10.7		10.7	7.1
III (19)	15.8	5.3		10.5	5.3	5.3	5.3	26.3	21.1			5.3

n = サンプル数

表4 対象GHの建物形式と築年数

単位：％

GH (n)	建物形式					築年数			
	農家	町家	戸建て	その他	不明	39年未満	39年～	70年～	100年～
I (28)	14.3	35.7	35.7	14.3		21.4	28.6	17.9	32.1
II (28)	21.4	32.1	32.1	10.7	3.6	21.4	42.9	17.9	17.9
III (19)	11.1	42.1	38.9	5.3	5.3			47.4	52.6

n = サンプル数

表5 対象GH立地地域の都市規模

単位：％

GH (n)	小市町村	小都市	中都市	中核市	大都市
I (27)	37.0	11.1	25.9	11.1	14.8
II (23)	43.4	13.0		8.7	34.8
III (16)	6.3	6.3	31.3	6.3	50.0

n = サンプル数

50.0％あり、中都市と大都市で87.6％を占めており、大都市や中都市の町家や戸建てが多いといえる。Ⅱは、小市町村および小都市と、大都市および中核市に二分される結果となっており、前者に立地する戸建てや農家と、後者に立地する町家が多いといえ、ⅠとⅢの中間的な特徴を有していることがわかる。

### 3.3 自然系の暮らしに関する意識

持続可能な（自然系の）暮らしについて関心があるかどうかを「ある」から「ない」までの4段階で尋ねたところ、図1のような結果となった。なお、Web上の質問では、2段階目と3段階目には言葉は付されていないが、図1では、便宜上、「まあある」「あまりない」という言葉を充てている。

全体として自然系の暮らしへの関心は高く、「ある」「まあある」を合わせると、いずれのグループでも8割～9割を占めており、特にⅠでは、「ある」が73.1%に上っている。

日頃から関心のある暮らし方や生き方について、図2に示す10項目（図中では項目名を簡略化しているものもある）を複数回答で尋ねたところ、これら項目についても関心は高く、全体としては、「モノの豊かさより心の豊かさ」が最も多く86.8%，次いで「スローライフ」「地産地消」が64.5%，「ローカリズム」が55.3%，「ミニマリズム」「地域おこし」が47.4%などである。

グループ別にみると、Ⅰは、全般に関心が高く、5割以上の項目は、「モノの豊かさより心の豊かさ」96.4%，「地産地消」75.0%，「スローライフ」「ローカリズム」67.9%，「地域おこし」「半農半X」53.6%，「自然農」50.0%など7項目である。ⅡやⅢでは、5割以上の項目は少なくなるが、Ⅱでは、「モノの豊かさより心の豊かさ」82.8%，「スローライフ」62.1%，「地産地消」58.6%など3項目、Ⅲでは、「モノの豊かさより心の豊かさ」78.9%，「スローライフ」62.1%，「地産地消」57.9%，「ミニマリズム」52.6%の4項目である。

小市町村や小都市に立地する事例が5割～6割弱あるⅠとⅡでは、「グリーンツーリズム」や「半農半X」など、農村地域の特性を反映した項目への関心が高い傾向にあるが、大都市や中核市に立地する事例が5割以上あるⅢでは、こういった項目が低くなり、立地にかかわらない暮らし方一般の項目への関心が相

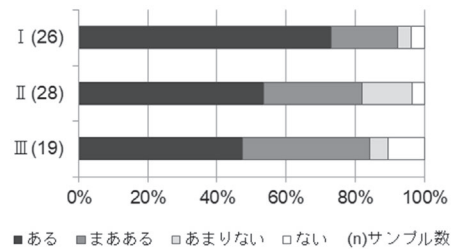


図1 自然系の暮らしへの関心

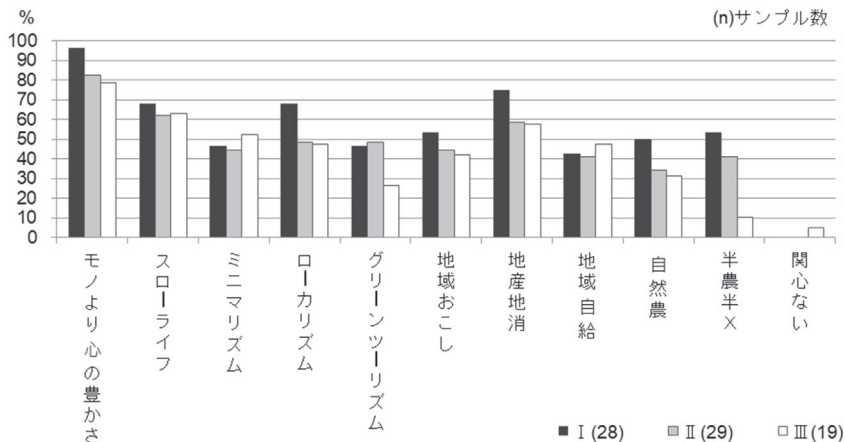


図2 日頃から関心のある暮らし方や生き方



## 暮らし方に着目した自然系ゲストハウス運営者の意識と価値観

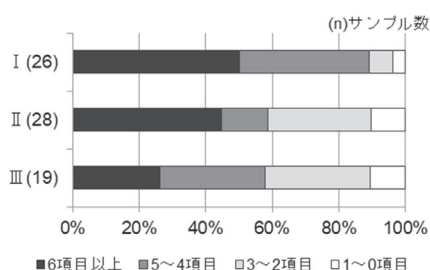


図3 日頃から関心のある暮らし方や生き方の項目数

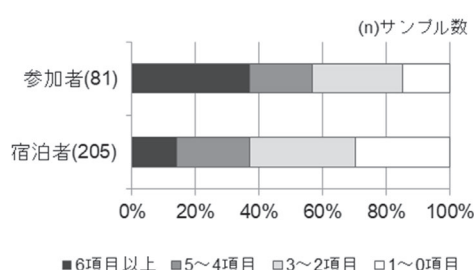


図4 日頃から関心のある暮らし方や生き方の項目数  
(イベント等参加者・古民家GH宿泊者)

対的に高い傾向にあることがわかる。

日頃から関心のある暮らし方や生き方の項目数を比較したところ、図3に示すように、Iが最も多く、「6項目以上」50.0%、「5～4項目」39.3%であり、4項目以上が89.3%を占めている。IIでは、「6項目以上」は44.8%でIと大きくは変わらないが、「5～4項目」が13.8%と少なく、4項目以上が58.6%と多くなるなど、Iに比べると項目数は少ない傾向にある。IIIでは、「6項目以上」は26.3%とさらに少なくなるが、これは先に述べた立地特性を反映しているためと考えられる。

日頃から関心のある暮らし方や生き方に関する10項目については、同様の項目を、松原（2020）において、暮らし方関連イベント等参加者81人に尋ねており、松原（2017b）においては、古民家GH宿泊者205人に尋ねている。詳しくはこれらの論文を参照いただきたいが、参考のために、両調査の結果を示してみたものが図4である。暮らし方関連イベント等参加者の方が古民家GH宿泊者よりも項目数が多く、関心の度合いが高いことが読み取れる。これらを、図3で示した運営者の結果と比較してみると、イベント等を実施しているIとIIの運営者は、イベント等参加者よりも関心度が高く、古民家のみIIIの運営者も、宿泊者に比べると関心度が高いことがわかる。これらの調査結果の範囲内ではあるが、自然系の暮らしに関心の高い運営者が、イベント等の実施や古民家のみGHの運営を行っていると考えられる。

日頃からこころがけている暮らし方や生き方について、図5に示す11項目（図中では項目名を簡略化しているものもある）を複数回答で尋ねたところ、全体としては、「モノをできるだけ大切に長く使う」71.1%、「日本あるいは地域の伝統食を大切にする」60.5%、「食事やモノをできるだけ手作りする」55.3%、「必要最小限のモノで暮らす」「ゆっくり暮らす」50.0%などが多く、野菜や米を作ったり、自給自足をこころがけたりといった立地条件に左右される項目は少ない結果であった。

グループ別にみると、Iでは、全般に、こころがけている割合が高く、5割以上の項目は、「モノをできるだけ大切に長く使う」85.7%、「日本あるいは地域の伝統食を大切にする」82.1%、「ゆっくり暮らす」67.9%、「食事やモノをできるだけ手作りする」「省エネルギー、再生可能エネルギー利用を心がける」64.3%、「無農薬・有機栽培などの自然食を大切にする」60.0%、「必要最小限のモノで暮らす」「地域おこしに寄与する」53.6%など8項目である。IIでは、Iに比べると全般に割合が低くなり、5割以上の項目は、「モノをでき



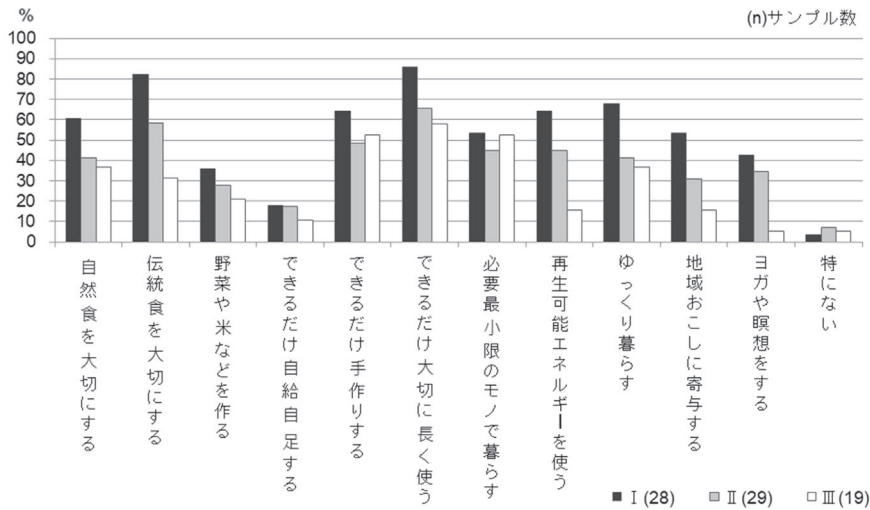


図5 日頃からこころがけている暮らし方

るだけ大切に長く使う」65.5%、「日本あるいは地域の伝統食を大切にする」58.6%の2項目である。Ⅲでは、さらに割合は低くなるが、「モノをできるだけ大切に長く使う」57.9%、「食事やモノをできるだけ手作りする」「必要最小限のモノで暮らす」52.6%などの3項目は5割以上である。Ⅲでは、先に述べた立地特性から、野菜や米作り、自給自足、地域おこし、ヨガや瞑想といった項目が少なくなっていると考えられる。

日頃からこころがけている暮らし方や生き方の項目数を比較したところ、図6に示すように、Ⅰが最も多く、「8項目以上」35.7%、「7～5項目」42.9%であり、5項目以上が78.6%を占めている。Ⅱでは、項目数が少なくなり、「8項目以上」20.7%、「7～5項目」27.6%となり、5項目以上は48.3%である。Ⅲでは、項目数はさらに少なく、5項目以上は15.8%である。

このように、今回対象としたGHの運営者は、いずれのグループでも自然系の暮らしへの関心が極めて高く、また、日頃から関心のある、あるいはこころがけている暮らし方や生き方の項目については、Ⅰが最も多く、次いでⅡが多い傾向にあった。これらへの関心の高さが暮らし方関連イベント等の実施につながっているものと考えられる。古民家などのⅢでは、大都市や中核市に立地する事例が多いという特性を反映して、農村的立地に関連する項目は低い傾向にあったが、立地にかかわらない項目については、Ⅱと同程度に関心が高いことがわかった。

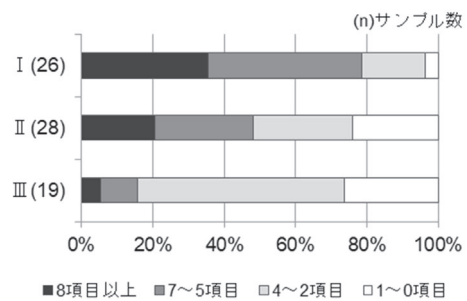


図6 日頃からこころがけている暮らし方項目数

### 3.4 イベント等実施状況

イベント等参加者の年代と居住地を示したものが表6である。年代では、Ⅰ、Ⅱともに、20代～30代の若い層が3割程度あるが、「幅広い年代」や「イベントによってさまざま」との回答もⅠでは60.7%、Ⅱでは58.3%あり、必ずしも若い層だけではないことがわかる。また、居住地をみると、Ⅰは、「近隣地域内」と「同一市町村内」とで28.6%、「同一都道府県内」が32.1%あり、比較的近い地域の人々が参加していることがわかる。Ⅱも、「近隣地域内」と「同一市町村内」とで33.4%であるが、「同一都道府県内」は少なく、「国内」と「イベントによってさまざま」とで54.2%となっており、Ⅰに比べると広い地域から参加している傾向にある。Ⅱでは、宿泊者がイベントにも参加している場合があるのではないかと推察される。

このように、イベント等実施GHは、宿泊によって遠方からの人々が集う場であるとともに、イベント等によっては比較的近い地域の人々が集う場ともなっており、この両方の役割を担っていることが特徴であるといえる。

これまでに実施したイベント等の種類をグループ別に示したものが図7である。なお、イベント等の分類については、松原（2019）および拙著（2020）において詳述しているので参照いただきたい。Ⅰでは、「食生活関連」「モノ作り関連」が78.6%と多く、「住生活関連」57.1%、「地域おこし関連」「健康・癒し関連」53.6%など、多彩なイベント等が行われていることがわかる。これに対してⅡは、全般に少ない結果であるが、「地域おこし関連」37.9%と「食生活関連」34.5%が相対的に多いことが特徴である。「暮らし総合関連」

表6 イベント等参加者の年代と居住地

単位：％

GH (n)	年代					居住地						
	子ども	20代～	40代～	幅広い	さまざま	近隣	市町村内	都道府県内	地方内	国内	さまざま	その他
Ⅰ (28)	3.6	32.1	3.6	32.1	28.6	10.7	17.9	32.1	7.1	7.1	21.4	3.6
Ⅱ (24)		29.2	16.7	25.0	33.3	4.2	29.2	8.3	4.2	16.7	37.5	

n = サンプル数

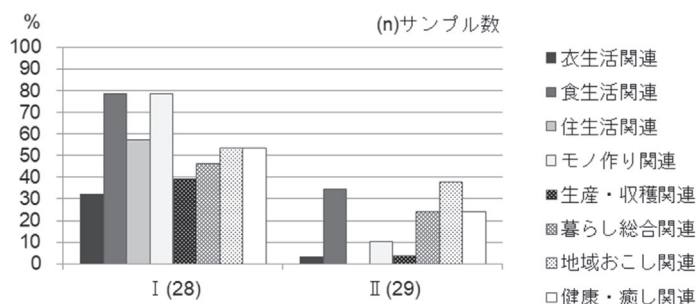


図7 これまでに実施したイベント等の種類

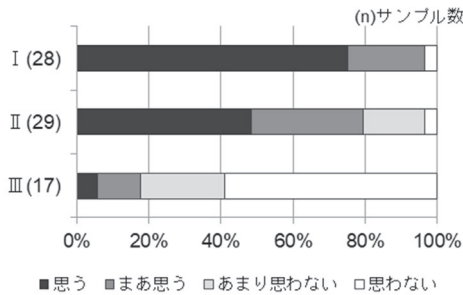


図8 今後のイベント等実施希望

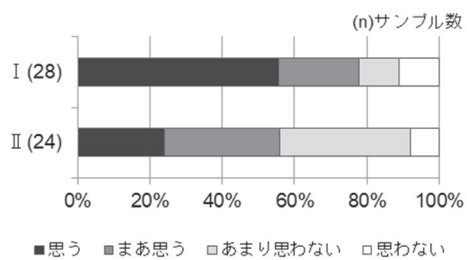


図9 今後の連携イベント等実施希望

「健康・癒し関連」も24.1%ある。「地域おこし関連」と「食生活関連」はI, IIともに行われていること、Iは、これらに加えて様々な種類のイベント等が行われていることが特徴であることがわかった。

今後、暮らし方関連のイベント等を実施したいと思うかについて、「思う」から「思わない」までの4段階で尋ねた結果を示したものが図8である。なお、Web上の質問では、2段階目と3段階目には言葉は付されていないが、図8では、便宜上、「まあ思う」「あまり思わない」という言葉を充てている。Iでは、「思う」75.0%、「まあ思う」21.4%であり、ほとんどが今後も実施したいと思っている。IIでは、Iに比べると「思う」は少なくなるが、「思う」48.3%、「まあ思う」31.0%など、8割が今後も実施したいと思っていることがわかる。イベント等を実施していないIIIでは、8割強が今後も実施しようと思わないとの結果であるが、「思う」5.9%、「まあ思う」11.8%など、実施したいと思っている例も2割弱あることに注目しておきたい。

他のGHと連携してイベント等を行ったことがあるかと尋ねたところ、Iでは、「ある」との回答が42.9%あり、具体的な記述も以下のように7例あった。「他地域のGHの女将などによる料理」(食生活関連3例)、「再生可能エネルギーについて」(暮らし総合関連1例)、「地域と共に生きる暮らしをベースにしたGH開業合宿」「他地域のGHとのコラボによる自主制作の映画の上映とオリジナルビールの紹介・提供」「三輪タクシー TUKTUKを複数のライダーで乗り継ぎ各地のGHに宿泊して日本を一周するツーリング」(地域おこし関連3例)などである。IIでは、「ある」との回答は11.5%と少なく、具体的な記述も、「糞土師伊沢正名氏のトーク」「マスキングテープでうちわに装飾→うちわを持って町を歩く→茶室のあるGHで抹茶をいただく(外国人向け)」(暮らし総合関連2例)のみである。

今後、他のGHと連携してイベント等を行いたいと思うかについて、「思う」から「思わない」までの4段階で尋ねた結果を示したものが図9である。「まあ思う」「あまり思わない」という言葉の使用については図8と同じである。Iでは、「思う」55.6%、「まあ思う」22.2%であり、合わせて77.8%が今後実施したいと思っている。IIでは、Iに比べると「思う」が少なくなるが、「思う」24.0%、「まあ思う」32.0%であり、合わせて56.0%が、今後実施したいと思っている。そこで、連携イベント等の現状と今後の希望を比べてみると、Iでは、現状42.9%→希望77.8%、IIでは、現状11.1%→希望56.0%となり、連携イベント等実施の希望は大きいことがわかる。

このように、イベント等については、Ⅰは、衣食住の暮らし方関連や地域おこし関連など幅広く実施しており、Ⅱは、地域おこし関連が主であるといった違いはあるが、Ⅰ、Ⅱともに、今後もイベント等実施を希望する声が多く、連携イベント等の実施にも肯定的であることから、それぞれの関心や立地状況などに基つきながら、今後もイベント等が実施されていくと考えられ、また、各地のGHが連携してイベント等を実施していく可能性も大いにあると考察できる。

### 3.5 自由記述にみる運営者の意識

全体的な自由記述を一覧したものが表7である。Ⅰでは、「エコビレッジの増加」「暮らしのお手本を宿泊者に伝える」など、自然系の暮らしが広がることを望む声や、「環境優先型GHの運営と環境活動」「持続可能性等に関心を持ち日本みつばちと共に暮らしている」「先人の苦労や自然の摂理を学び、現代の暮らしに感謝することを重視」など、自らが実践している自然系の暮らしが記されていることが特徴であり、自然系の暮らしへの関心の高さがうかがえる。また、今後の希望として「地域の農家と連携したグリーンツーリズム」「暮らし方の提案やイベントの増加」といった声も記されている。

Ⅱでも、「持続可能な暮らしの浸透」「シンプルな生活をしたいと思ってほしい」など、自然系の暮らしの広がりを望む声があるとともに、「地域文化の情報交換」「移住促進とローカルビジネス展開事業者とのコラボ」「コミュニティ」など、地域あるいは地域おこし関連の記述があることが特徴である。図7の結果でも、Ⅱでは、イベント等の種類数は少ないものの、「地域おこし関連」イベント等は4割弱で実施されていることを考え合わせると、地域の暮らしや文化に関心を持つ運営者が多いのではないかと推察される。今後の希望についても、「自然農の田畑でゲストとともに体験」「地方との繋がりで無農薬農業」「地域の子供と高齢者を繋げて遊びやものづくりのイベント」などの声が記されている。この他に、「宿泊者がゆっくり過ごせるようにあまりイベントをしない」といった宿泊優先の記述もある。

Ⅲでも、「地元の人との交流、食を通じた古民家の暮らしの表現」といった地域関連の記述がある。イベント等を実施していないことに関しては、「イベントを実施している人は素晴らしい」という応援の声がある一方で、「一度で何かをとということに関心が持てない、自分の生活を平静にしたい」との記述や、「古民家でほっこりしてほしい」といった記述もある。Ⅲでは、古民家での宿泊に力点が置かれていることがうかがえる。

このように、自由記述からみても、Ⅰは、自然系の暮らしや地域おこしへの幅広い関心を有し、Ⅱは、主として地域おこしへの関心を持ち、Ⅲは、古民家での宿泊に力点を置いているというように、グループによって関心のありようが異なっていることが読み取れた。

### 3.6 イベント等参加者、古民家ゲストハウス宿泊者への影響

先に述べた自由記述でも、イベント等参加者や宿泊者に自然系の暮らしを伝えたいとの記述があったが、実際にはどうかであろうか。この点について、イベント等の実施が、参加者の暮らし方に関する意識や価値観に影響を与えているという手ごたえがあるかどうかを、「ある」から「ない」までの4段階で尋ねた結果を示したものが図10である。「まあある」「あまりない」という言葉の使用については図1と同じある。Ⅰでは、「ある」39.3%、

表7 自由記述

I	持続可能な暮らしとゲストハウスが発展して日本各地にエコビレッジが増えるといいなと考えている
	狩猟やアウトドアアクティビティを取り入れた持続可能な暮らしのお手本をこの宿を通して宿泊者に伝えていきたい
	震災後失われた海を何とかしたいと思い、環境優先型ゲストハウスの運営や、SUP・カヌーのインストラクターをしながら環境活動を行なっている
	学生時代から中山間地域や持続可能性、ローカルな暮らしに関心を持ち、日本の田舎やポートランドなどに足を運び、現在日本みつばちと共に暮らしている
	地域の歴史や文化も踏まえた昔の暮らしや生き方から先人の苦労や自然の摂理を学び、現代の暮らしに感謝することに重きをおいている
	特に自然系の暮らしに興味があるわけではなく、たまたま暮らした場所でそこにふさわしい普通の暮らしをしているに過ぎない
	地域の農家と連携して、グリーンツーリズムも始めていきたい
	観光事業に依存しない暮らし方の提案やイベントを増やす、または参加などをし、今後に活かしていけたらと考えている
II	持続可能な暮らしがもっと多くの人に浸透していけばいいなと思っている
	物をあまり置かないシンプルな生活をしたいと思ってもらえる宿でありたい
	京都の銭湯文化など、各地域の文化などの情報交換を続けていく
	移住促進とローカルビジネスを展開している若い世代の事業者とコラボしている
	ゲストハウスではビジネスは考えず「コミュニティ」を考えている
	ゲストハウスの建物の修繕や自然農の畑や田んぼの基盤ができれば、ゲストと一緒に体験する形で何かできないかな
	無農薬農業に興味があるが東京では無理なので地方と繋がりを持ちたい
	地域の子供と高齢者を繋げて、昔からの知恵や伝統の遊びやものづくり、川遊びなどを体験するイベントをやりたい
III	宿泊者が、ゆっくりのんびり過ごせるように、あまり宿内イベント等をやらないようにしている
	必ずしも持続可能な暮らしということではなく、「すべての人々が生きる喜びに満たされますように」との願いを理念として宿を運営している
	宿泊客だけでなく地元の人との交流も深めるため季節野菜と玄米のランチ営業をはじめた食を通じて、古民家の暮らしそのものを表現していけたらと思う
	あまり自主的に行う事はできないが、イベントを実施している人は素晴らしいなと思う応援している
	創業220年の町家で、中庭、天正疎水の瀬音と季節の草花を愛でて、ひとときでもほっこりした気分を味わってもらえれば……
	イベントを行わないのは、一度で何かを、ということにあまり関心を持てずにいるから自分の生活を平静にしたいのかもしれない

## 暮らし方に着目した自然系ゲストハウス運営者の意識と価値観

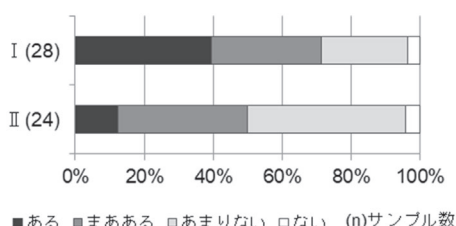


図10 イベント等参加者への影響

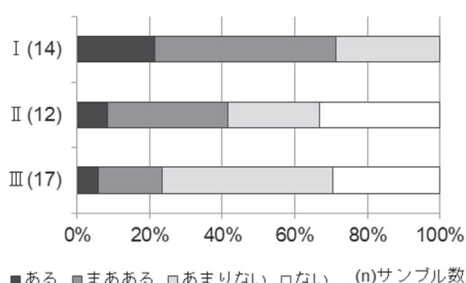


図11 古民家GH宿泊者への影響

「まあある」32.1%であり、合わせて71.4%が手ごたえを感じており、IIでは、Iに比べると少ないものの、「ある」12.5%、「まあある」37.5%で、半数が手ごたえを感じていることがわかる。

手ごたえの具体的な内容を示したものが表8である。「食生活関連」「生産・収穫関連」「暮らし総合関連」「地域おこし関連」「健康・癒し関連」「その他」など、幅広い具体例の記述があり、全般に、Iの方がIIよりも記述が多い結果である。

「食生活関連」では、無農薬・有機栽培の食材によって食育に関心を持つ人が増えた、加工食品の添加物を意識するようになった、自分で作れば安心素材で簡単に作れる、近隣の有機農家への注文が増えたなど、安心安全な食に対する関心を喚起していることが読み取れる。「生産・収穫関連」では、山菜採りによって自然に感謝し、狩猟体験によって命の重さを知り、普段何気なく食べている肉や、環境負荷の大きい畜産について深く考えるなど、自然や命と生産・収穫との関連の再考、再認識を促していることがわかる。また、参加者が農業や畑作業をはじめのきっかけとなっているとの記述もある。「暮らし総合関連」では、ソーラーパネルの取り付けにつながった、ビーチクリーンによってゴミを出さない意識が芽生えたなどエコ意識の高まりがうかがえる。「地域おこし関連」では、イベント等が移住者の増加につながっているとの記述が多く、また、移住者が自然系の活動や生活をしているとの記述もある。「健康・癒し関連」は、健康・癒しに関する情報交換の場となっていることや、イベント催行者（ヨガの先生など）と参加者がその後もつながっているといった記述がある。

これらの他に、イベント等への参加一般に関しては、イベント等内容への共感や感謝、満足といった反応、リピーターの増加や参加者の増加、イベント等の内容に関心を持つ人の意識の一層の高まり、意見交換による意識の高まり、価値観の見直しや新しい発見のよい機会といった記述があり、イベント等が参加者の意識を高め、価値観変化を促している様子が読み取れる。

次に、古民家での宿泊が、宿泊者の暮らし方に関する意識や価値観に影響を与えているという手ごたえがあるかどうかを、「ある」から「ない」までの4段階で尋ねた結果を示したものが図11である。「まあある」「あまりない」という言葉の使用については図1と同じである。イベント等に比べると「ある」の回答は相対的に少ないが、Iでは、「ある」21.4%、「まあある」50.0%であり、合わせて71.4%が手ごたえを感じており、IIでは、Iに比べると少ないものの、「ある」8.3%、「まあある」33.3%で、合わせて41.6%が手ごた



表8 イベント等参加者への影響（具体的内容）

食生活関連	
I	食の見直し
	近隣の有機農家に注文が入るようになった
	無農薬・自然栽培食材の販売を通じて食育に関心を持つ人々が増えていると感じる
	ジャム、ジュース、ピザ、ピザのソースなど自分で作れば安心素材で家でも簡単に作れると喜んでもらえた
II	情報交換・共有によって、選択の幅が広がる機会になっている（梅干しの漬け方、最近どこで野菜を買っているか）
	加工食品などの添加物について意識するようになった
生産・収穫関連	
I	山菜採りの楽しさ、美味しさを味わい、自然に対する感謝の気持ちを持ってもらえた
	狩猟体験で鹿の解体を実際にやることで、命の重さを知ってもらい、普段何気なく食べているお肉や、環境に大きな負荷を与えている畜産についてなど、深く考えてもらうこと事ができた
	参加者が実際に農業を始めた
II	畑作業をきっかけに、参加者が自分で畑を始めた
暮らし総合関連	
I	参加者がソーラーパネルを取り付けた
	月に一度、津波の影響を受けたエリアのビーチクリーンをしており、清掃に参加してもらうことで、沿岸部のゴミを回収するだけでなくゴミを出さない意識が芽生える
地域おこし関連	
I	田舎に移住して来る人も何人かいた
	都市から地方への移住という結果につながった事例はたくさん
	地域への移住
	関連イベントへの参加により移住者が増えるなどした（自然系の活動、生活をしている）
II	地域への移住者の増加
健康・癒し関連	
I	情報交換・共有によって、選択の幅が広がる機会になっている（よく眠れるように実践していること）
II	イベント催行者（ヨガの先生など）と参加者がその後もつながっている
その他	
I	イベントの内容に共感して、開催への感謝のメールをもらった
	SNSで感想を投稿してくれた（イベントに満足したということ）
	参加者が増えてきている
	イベントリピーターになる
	一度参加した人がリピーターになったり、他のイベントにも参加したりしている
	元々興味を持った人が参加してくれているので、変化というよりは拡張に近い
II	意見の交換により、お互い、より意識が高まっている
	価値観を見直したり、新しい発見などのいい機会であり、より繋がりが深くなるかと思う



えを感じていることがわかる。しかし、古民家のみⅢでは、「ある」5.9%、「まあある」17.6%で、合わせて23.5%であり、あまり手ごたえを感じていない結果である。

手ごたえの具体的な内容を示したものが表9である。「古いもののよさ」「古いものの心地よさ」「古いものの活用」「古民家に住む」に分けることができ、ⅢよりもⅠやⅡで記述が多い結果となっている。

「古いもののよさ」では、喜んでもらえる、新鮮な体験になる、「古いものの心地よさ」では、居心地のよさを体感してもらえる、庭のそばで寝泊まりすることで心的療養やリラックスにつながる、「古いものの活用」では、古いものを大切に修理して使うことへの評価や関心あるいはそういった価値観が生まれる、具体的な再生手法を見学者や宿泊者の古民家再生に活かす、「古民家に住む」では、実際に古民家を借りるあるいは検討する人がいる、などである。

古民家のみⅢは、宿泊者への影響の認識度、具体的記述のいずれにおいても、ⅠやⅡより少ない結果であった。ⅢグループのGHは、都市部や観光地に立地し、宿泊に力点を置いている例が多いと考えられることから、暮らし方に関して宿泊者とコミュニケーションすることがあまりないため、手ごたえ感が薄いのではないかと推察される。

先にも述べたが、松原（2020）においては、暮らし方関連イベント等参加者81人に意識や価値観の変化を尋ね、松原（2017b）においては、古民家GH宿泊者205人に同様に尋ねているので、参考のために、両調査での結果を図12に示してみた。「まあ思う」「あま

表9 古民家宿泊者への影響（具体的内容）

古いもののよさ	
Ⅰ	古い建物に泊まる経験を通して古いものの雰囲気を肌で感じて喜んでもらえる
Ⅱ	皆さん間違いなくびっくりして喜んでくれる
	外国人や若い世代には逆に新鮮な体験になる
古きもののよさ	
古いものの心地よさ	
Ⅰ	古民家の持つ居心地のよさを体感して、来てよかったといってもらえる
Ⅲ	庭のすぐそばにある部屋で寝泊まりする（自然の傍で暮らす）ことで、心的療養やリラックスにつながるという感想をよくもらう
古いものの活用	
Ⅰ	古いものを大事に大切に使うという価値観
	古民家に宿泊することで、物や家を直して使うということへの関心がある
	断熱や改修方法など、見学者や宿泊者の住まいあるいは宿泊施設の参考にし、再生に活かしている
Ⅱ	100年前の古建具や梁を見て、古いものでも使い方で利用できる
Ⅲ	これから古民家をリノベしよう、あるいはしたいと思っている人が見学に来る
	元の建物で使われていたものを再利用することに対して、好意的な感想を抱く人が多い
古民家に住む	
Ⅰ	実際に古民家を借りた人がいる
Ⅱ	田舎暮らしの具体的イメージが付きやすいようで、実際に古民家に住むことを検討していた

り思わない」という言葉の使用については図8と同じである。

これによると、イベント等参加者では、意識や価値観に変化があったと「思う」が48.1%、「まあ思う」が30.9%であり、合わせて79.0%に変化があったことがわかる。これは、Ⅰグループ運営者の「手ごたえ感」の結果よりも高い値である。イベント等参加者が回答した具体的内容については、松原（2020）を参照いた

きたいが、自然への見直しや感謝、農業の楽しさや米作りの魅力への気づき、エコへの関心の高まり、人とのつながりや地域の魅力などへの気づきあるいは再認識などであり、運営者からみた参加者への影響と類似した内容となっている。

また、古民家宿泊者では、意識や価値観に変化があったと「思う」が24.1%、「まあ思う」が40.4%であり、合わせて64.5%に変化があったことがわかる。古民家宿泊者の結果は、Ⅰグループ運営者の「手ごたえ感」と同じような値であり、Ⅲグループ運営者のそれよりもはるかに高い数値であることから、Ⅲでは、運営者の意識にかかわらず、古民家での宿泊が宿泊者の意識や価値観に影響を与えているのではないかと推察される。古民家宿泊者が回答した具体的内容については、松原（2017b）を参照いただきたいが、古いもののよさや活用できることへの再認識、古いものの心地よさや落ち着きなど、やはり運営者からみた参加者への影響と類似した内容となっている。

このように、GH運営者は、イベント等参加者への影響については、Ⅰ、Ⅱともに手ごたえを感じており、具体的内容についても幅広い記述があるなど、イベント等が参加者の意識を高め、価値観変化を促している様子が読み取れた。古民家宿泊者への影響についても、グループによって違いはあるものの何らかの手ごたえを感じており、具体的内容も記述されているなど、宿泊が古民家の優れた点への気づきや再認識を促している様子が読み取れた。

#### 4. まとめ

暮らし方からみた自然系ゲストハウスの特質を考察することをねらいとして、運営者の意識や価値観を捉えたところ、以下の結果を得た。

①対象としたゲストハウスは、イベント等の実施状況により、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3つのグループに分けることができた。立地地域では、Ⅰは、小市町村や小都市および中都市、Ⅱは、小市町村および小都市と、大都市および中核市、Ⅲは、大都市と中都市に立地している例が多い結果であった。

②いずれのグループの運営者も自然系の暮らしへの関心は極めて高く、日頃から関心のある、あるいはここがけている暮らし方や生き方の項目については、Ⅰが最も多く、次いでⅡが多い傾向にあった。これらへの関心の高さが暮らし方関連イベント等の実施につながっているものと考えられる。また、Ⅲでは、農村的立地に関連する項目は低い傾向に

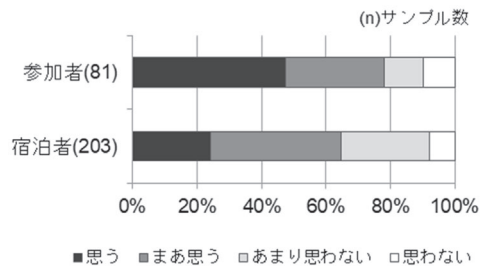


図12 イベント等参加者・古民家GH宿泊者の価値観変化

あったが、立地にかかわらない項目については、Ⅱと同程度に関心が高い結果であった。

③イベント等の参加者は、比較的近い地域の人が多いことから、イベント等実施ゲストハウスは、宿泊によって遠方からの人々が集う場であるとともに、イベント等によっては地域の人々が集う場ともなっており、この両方の役割を担っていることが考察できた。イベント等の内容では、Ⅰは、衣食住の暮らし方関連、地域おこし関連など幅広く、Ⅱは、地域おこし関連が主であることがわかった。古民家のみのⅢは、古民家の魅力を伝えることに力点が置かれているといえる。

④イベント等参加者への影響については、Ⅰ、Ⅱともに手ごたえを感じており、具体的な内容では、安心安全な食に対する関心を喚起する、自然や命と生産・収穫との関連の再認識を促す、エコ意識を高める、移住者の増加につながる、意見交換によって意識が高まる、価値観の見直しや新しい発見の機会となる、などの記述があり、イベント等が参加者の意識を高め、価値観変化を促している様子が読み取れた。

⑤古民家宿泊者への影響についても、グループによって違いはあるものの何らかの手ごたえを感じており、具体的な内容では、喜んでもらえる、新鮮な体験になる、居心地のよさを体感してもらえる、心的療養やリラックスにつながる、古いものを大切に修理して使うことへの評価や関心あるいは価値観が生まれる、具体的な再生手法を古民家再生に活かす、実際に古民家を借りるあるいは検討する人がいる、などの記述があり、宿泊が古民家の優れた点への気づきや再認識を促している様子が読み取れた。

⑥自然系ゲストハウスは、自然系の暮らしに関心が高い運営者によって運営されており、そこで実施されるイベントや体験プログラムあるいは古民家利用を通して、参加者や宿泊者の意識変化や価値観変化が促されていることを、運営者の側からも捉えることができた。

## 参考文献

- 松原小夜子 2016：都道府県別にみた宿泊型ゲストハウスの開業実態，*椋山女学園大学研究論集 自然科学篇*（47），95-107.
- 松原小夜子 2017a：古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容—人々の交流状況に着目して，*椋山女学園大学研究論集 自然科学篇*（48），159-180.
- 松原小夜子 2017b：暮らし方に着目した古民家ゲストハウス宿泊者の意識と価値観，*人間と生活環境*24（2），47-59.
- 松原小夜子 2018：宿泊型ゲストハウスにおけるイベントおよび体験プログラムの実施状況，*椋山女学園大学研究論集 自然科学篇*（49），95-107.
- 松原小夜子 2019：宿泊型ゲストハウスにおける暮らし方関連イベントおよび体験プログラムの実施状況，*椋山女学園大学研究論集 自然科学篇*（50），73-90.
- 松原小夜子 2020：宿泊型ゲストハウスにおける暮らし方関連イベントおよび体験プログラム参加者の意識と価値観，*椋山女学園大学研究論集 自然科学篇*（51），65-78.
- 松原小夜子『持続可能な暮らし×自然系ゲストハウス—脱消費，スロー，ミニマル，ローカル』風媒社，2020.